

4. 重障児施設入所者における摂食機能の実態(東日本歯学会第17回学術大会)

著者名(日)	島袋 鎮太郎, 鈴木 崇之, 桜井 有子, 大村 光枝, 河野 英司, 五十嵐 清治
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	18
号	1
ページ	229
発行年	1999-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008402/

4. 重障児施設入所者における摂食機能の実態

○島袋鎮太郎, 鈴木 崇之, 桜井 有子,
大村 光枝, 河野 英司, 五十嵐清治
(北海道医療大学歯学部小児歯科学講座)

重障児者施設入所者の摂食障害の現状を把握し, 精神発達, 運動発達の障害程度と摂食障害との関連を明らかにすることを目的として, 札幌市内の重症心身障害児施設「札幌あゆみの園」の入所者全124名(男72, 女52)を対象に摂食機能の調査を実施した。

調査対象者の平均年齢は32歳10ヶ月, 1人平均現在歯数は22.6歯であった。主要病名は精神発達遅滞・脳性麻痺・てんかんを合併する者が最も多かった。障害程度の指標である大島分類では1～4の最重度の者が60名, 5以上の者が64名であった。

集計においては, 精神発達, 運動発達の障害程度と摂食障害との関連について検討するため, 精神発達障害度別にIQ20未満を「精神遅滞重度群」, IQ20以上を「精神遅滞軽度群」の2群に分け, また運動機能障害度別では「寝たきり」の者を「運動障害重度群」, 「座れる」以上の者を「運動障害軽度群」の2群に分けて各々集計し分析を行った。

その結果, 運動機能の障害程度と摂食障害の間の関連については, 「咀嚼障害」に関しては, 重度群と軽度群で差が見られなかったが, 「捕食障害」「嚥下障害」に関しては運動機能障害が重度の者ほど摂食障害の発現頻度も高かった。

一方, 精神発達の障害程度と摂食障害との間には関連性が見出せなかったが, 今回の調査は重障児施設入所者が対象であり, 全ての者がIQ50未満に偏っていたためと思われた。しかし, 本施設における摂食障害の発現頻度は「咀嚼障害」「捕食障害」「嚥下障害」の順であり, この結果は, 「嚥下障害」が多く「咀嚼障害」が少ない脳血管障害後遺症患者の場合と異なり特徴的であった。

以上のことから, 摂食障害の中でも特に「捕食」と「嚥下」の障害に関しては, 精神発達遅滞とは関係なく運動機能障害に関連して発現し, 「咀嚼障害」は主として精神発達の障害と関連するのではないかと考えられた。

5. 痛みに対する不安の影響について

○大桶 華子, 工藤 勝, 佐藤 雄季,
河合 拓郎, 加藤 元康, 片桐 和人,
國分 正廣, 新家 昇
(北海道医療大学歯学部歯学麻酔学講座)

【目的】歯科治療時のストレスによる偶発症発生防止のため, 積極的に静脈内鎮静法を適応している。しかし, 静脈路確保のための前腕静脈の皮膚・血管穿刺時には痛みを伴う。そこで, 穿刺に対する精神的負担(不安)の程度が痛みにもどのように影響するかを検討した。

【方法】State-Trait Anxiety Inventory (STAI: 不安を不安傾向(特性不安)と不安状態(状態不安)に分けて評価する自記式心理テスト)を健康成人ボランティアに行った。特性不安の結果からボランティアを, 不安を抱きやすい性格(高い特性不安: HTA)と不安の抱きやすさが普通(普通の特性不安: NTA)の2群に分けた。その後, 前腕静脈(肘窩・橈骨遠位端部・手背の3部位)の静脈確保を22G静脈留置針で行った。静脈確保に伴う痛みはVisual Analogue Scale - pain (VAS: 0; 痛みな

し, 100; 耐えられない痛み)で評価した。同時に静脈路確保時の状態不安は, 不安を6段階の似顔絵で表示した顔不安レイティングスコア(FAS: 0; 笑顔, 5; 強度な不安顔)で評価した。

【結果】VASによる痛みは駆血時のHTAとNTAで差はなく, 皮膚・静脈穿刺時ではHTA (42.2 ± 20.2 [平均 \pm S.D.])がNTA (35.6 ± 18.6)に, 留置針挿入時はHTA (46.1 ± 22.5)がNTA (33.3 ± 22.4)に比べてそれぞれ有意に高かった。なお, FASによる状態不安は駆血時で差を認めず, 皮膚・静脈穿刺時および留置針挿入時ともにHTA (穿刺: 2.4 ± 0.9 , 留置: 2.3 ± 1.1)がNTA (穿刺: 1.9 ± 0.9 , 留置: 1.8 ± 1.0)より高い結果となった。

【結語】不安をいだきやすい性格の患者は静脈路確保時に高い不安状態となり, 同じ刺激に対しても痛みを強く